

令和2年度 学校評価（自己評価）に係る成果と課題・改善方策

1 学校経営の努力点

- (1) 確かな学力の定着
- (2) 心の教育の充実
- (3) 健康安全教育の推進
- (4) 開かれた学校づくりの推進

2 成果と課題・改善策について

(1) 確かな学力

① 甲府スタイルの授業の推進 <生徒①②③④ 保護者①②③ 職員①②③④> (わかる授業・学びたくなる授業づくり)

- ・ 全職員が授業の工夫に取り組み、また生徒の93%が積極的に授業に参加したと答えている。指導者が「わかる授業」、「興味・関心をひく授業づくり」を心がけ、教材作りや、ワークシートの活用により、生徒も積極的に授業に臨んだ結果だと思われる。

しかし、保護者の結果を見ると、「授業に意欲的に取り組み、内容がわかっているか」ということに関して、18%が「あまりできていない」、6%が「できていない」としている。これは、家庭での生徒の学習の取り組みやテスト結果、成績等で不安に感じていることの現れだと思われる。

今後は、学習の計画や、現在学習している内容、学習に対する姿勢など、個人的な内容を丁寧に家庭に伝え、自主的な学習を支えるためにも、家庭と学校の連動した協力体制づくりが必要だと考えている。そのために、学習ガイダンスの有効活用や、通信の発行、電話連絡など、日々の連携に努めたい。

- ・ 家庭学習に自主的に取り組もうとした生徒が多いことが、生徒と保護者のアンケートからうかがえる。このことから、今年度、授業と家庭学習のつながりを意識して実践をしたことに効果があったことがわかる。教師から働きかけることが有効であるが、その働きかけのあり方について、各教科、学級での支援について今後も様々な角度から取り組んでいきたい。

また、全校で朝読書の時間を確保して取り組んではいるが、全体的に意識が低いという結果がある。今年度は小グループによる、興味ある新聞記事を参考に新聞スクラップ作りに取り組んだ。内容を読み解き、要約し、伝える活動である。

表現力を高める目的ではあったが、読書への興味関心を高める方策としても有効であると感じているため、今後も計画的な活動にしていきたいと感じている。

- ・ 今年度は「主体的・対話的で深い学び」をテーマに一人一実践と授業参観を実施した。これにより、効果的な学習形態、発問のあり方、ICT の活用など教科での特色を生かした指導のあり方について研究を深めることができた。今後も生徒の学習意欲の向上につながる効果的な指導法について、ICT の活用も含め、研究を深めたい。

②特別支援教育への共通理解と推進

- ・ 特別な支援を必要とする生徒についての情報や、その支援のあり方について全職員で共通理解を図るため、毎月の職員会議や学期ごとに情報共有の会を設けて、支援体制づくりに努めた。また、通常学級に在籍する合理的配慮が必要な生徒に関する情報の収集を行うため、学校生活でのアンケート調査を実施し、現状の把握に努めた。
- ・ 必要に応じ、当該学年や担任と連携して保護者との教育相談を行い、本人や保護者に具体的な目標や支援方法を示し、学校と家庭の協力体制づくりに取り組んだ。来年度は夏季校内研で、特別支援教育に関する校内研修会を実施し、特別支援教育の推進のため、学校の現状に即した指導・支援のあり方に関する学習会や共通理解の場を計画的に設定し、指導体制の強化に取り組みたい。

(2) 心の教育

① 道徳 <職員⑧>

- ・ 教員アンケート結果から、肯定的な回答がほとんどであり、本校の学校経営の努力点である「心の教育の充実」に向けて、前向きに取り組んできたことがうかがえる。
- ・ 今年度は、年度が始まって間もなく、評価についての学習会を実施した。早い時期に実施したことで、全教員の共通理解のもとで「考え、議論する」道徳をスタートすることができた。1 時間の道徳の授業の中で生徒が考え、学んだことを記録する北中の OPPA は、個人の成長を認め励ます評価である。同時に、教員にとっては、1 時間の道徳の授業を振り返ることのできる評価材料として有効に活用し、授業改善につなげることができた。
- ・ 発問や授業形態を工夫することで「考え、議論する」道徳の実践を積み重ね、

授業改善を図ってきているが、より効果的な指導法や教材の活用など、今後も研究を進め、深い学びにつながる授業づくりに取り組んでいきたい。また、授業と評価のあり方について研究を深め、生徒が1時間の授業のねらいにより迫ることができるような授業づくりに、全教員で取り組んでいきたい。

② 学校生活の向上と学友会活動 <生徒⑨⑪⑫⑬ 保護者⑦⑨⑩⑪ 職員⑨⑩⑪>

- 生徒、保護者の思いやりに関する質問(友達に思いやりを持って接しているか。)では、A(よくできている)とB(だいたいできている)につけているのは生徒、保護者ともに97%と高い評価となっている。

コロナ禍の難しい状況のなかで、日々の生活や、例年とは違う形で行われる行事を協力して乗り越えてきたことでこのような結果になったと思われる。しかし普段の生活のなかで、時折心無い言動が見られる場面もあるため、今後も生徒の内面を理解しながら、学級・学年その他の諸活動を通して思いやりの心を育てていきたい。

今年度、学友会で行ったいじめ撲滅宣言のような生徒が主体となる取り組みは、生徒の意識化を高め、お互いを見つめるよい機会となったと感じている。引き続き行っていくとともに、新しい取り組みについても検討したい。

- 生徒、保護者の学友会活動に関する質問(学友会活動に積極的に参加しているか。)では、A(よくできている)とB(だいたいできている)につけているのは生徒91%、保護者90%と高い評価となっている。

行事や委員会活動など、内容や規模は縮小されたが、その中でたくさんの工夫を凝らして活動を行ったことで、例年と同じように達成感や充実感を得ることができた。しかし約1割はできていないとの評価であるため、来年度は今年度の活動をベースとして、内容を再度検討し、新しい取り組みが行えるとよいと考えている。

- 教員のきまりやマナーに関する質問(きまりやマナーへの意識を高める指導に努めている)では、AとBの合計は100%であった。生徒、保護者のきまりを守っているかの質問では、AとBにつけているのは生徒、保護者ともに97%であった。生徒、保護者の進んであいさつをしているかの質問では、AとBにつけているのは生徒91%、保護者89%である。

アンケート結果を見ると、きまりとあいさつともに高い評価となっている。実際に学校生活でも自主的にチャイムよりも早く着席する習慣が身につけたり服装の乱れがなかったりと、学友会本部・学年学友会を中心に生徒自らが学校生活を良くしようとしている。あいさつについては、自ら進んでという生徒は

アンケート結果ほど多くないように感じている。例年、学友会役員による朝のあいさつ運動や各部の部長による下校指導などの取り組みがなされているが、今年度は実施できていない。このことも影響していると考えられるが、北中生としての誇りをもって、学校内でも地域や家庭に戻ってもしっかりとあいさつができるように、学級・学年と学友会が連携し、あいさつに関する意識付けや取り組みを行っていききたい。

③ 一人ひとりのよさを生かす学級・学年運営 <生徒⑤ 保護者⑨ 職員⑤>

- ・ 生徒は、「困ったことがあったときに親・先生・友だちに相談しているか」という質問に対して、81.7%がA・Bに回答しており、多くの生徒が困りごとを解決する手だてを持っていることが分かる。保護者は、自分の子どもが積極的に学友会活動に参加しているかという質問に対して、90.4%がA・Bに回答しており、肯定的な評価である。また、「生徒理解に努め、信頼関係づくりに取り組んでいるか」という質問に対しては全ての職員がA・Bに回答しており、職員が重点的に指導していることが分かる。
- ・ 一人ひとりのよさを認め、生かす集団づくりに向けた職員の取り組みの成果として、保護者から「生徒が活躍する場を持って学校生活を送っている」と認識していることが挙げられる。ただ、80%以上の生徒が「誰かに相談できる相手を持ってはいる」と答えているが、「相談できる相手がない」と答えたおよそ20%の生徒がいることを重視し、より一層の生徒理解に努めるとともに、相談体制のさらなる充実に取り組んでいきたい。

そのために、学年間・各教科担任・部活動顧問等との十分な連携を取り、共通理解を図りながら、生徒との信頼関係構築に努め、生徒個人や集団の現状を把握するとともに、必要な支援を適切に行っていききたい。

④ いじめ・不登校の未然防止・早期対応

<生徒⑥⑦⑧⑩ 保護者④⑤⑥⑧ 職員⑥⑦⑫>

- ・ 学校の友だちとの人間関係や学校での居場所についての質問では、生徒・保護者ともにおよそ95%が肯定的に回答している。また、職員へのアンケートでは、二者懇談の実施や情報交換、家庭との連絡、生徒の居場所をつくる取り組みなどの項目において、およそ60%がAと回答し、Bという回答と合わせるとほぼ100%となった。
- ・ 学校では、いじめや不登校の未然防止に向けて、学校生活アンケート、二者懇談の実施、職員間の情報交換等により、生徒の状況を把握し、生徒理解に努めて

きている。アンケートでも、多くの生徒や保護者は「学校での人間関係や居場所について満足している。」と回答している。現在、いじめの件数も少なく推移している。

今後も未然防止に向け、迅速かつ適切に対応するためにも、職員間の情報交換をさらに綿密に行うとともに、家庭との連絡を密にとっていきたい。

また、生徒一人ひとりの個性を理解し、指導・支援を実践していくために生徒支援のあり方、生徒理解の方策などの研修会への参加や学習会の実施により、教師の指導力向上を目指すとともに、支援体制や相談体制の強化を推進していく必要があると考える。

(3) 健康安全教育

① 実践的な防災・防犯訓練の実施 <生徒⑭⑯ 保護者⑫⑬ 職員⑬⑭>

- ・ 「自助」意識について、C、D を選択した生徒が数名いた。全体で見るとごく一部ではあるが、「命の大切さ」を意識して日常的に指導、支援を行う必要性を感じている。道徳や諸活動の場面で、生徒の心に響くようなアプローチをしていきたい。
- ・ 生徒、教員に関しては、災害時に正しく行動できるといった数値が高かった。一方で、家庭の中で「防災に関する約束事があるか」という問いに関しては、約3割がないという回答であった。今年度は、例年に比べ十分に避難訓練を行うことができなかった。しかし、学時や総合的な学習の時間を活用し、防災に関する学習や防災に関わる動画など、できる範囲で防災教育に努めてきた。

今後は、通信などを用いて災害時の話を家庭でもできるような情報の発信にも努めたい。また、避難時に必要なもの、避難場所の確認、非常時における家族内の約束事など、基本的な事柄こそ今後の指導として取り上げていきたい。

② 健康安全への意識化、体力の向上 <生徒⑭ 保護者⑫ 職員⑬>

- ・ この項目は、直接的な質問項目にないが、教員質問13、生徒質問14、保護者質問12の「命の大切さ」関わることであり、情報発信や個別指導に努めたい。
- ・ 今年度は、新型コロナウイルス感染症の流行により、休校措置から始まった。
【新しい学校生活】を意識して、1日の生活のすべてに感染症予防対策が求められている。朝の健康チェックから始まり、石けんでの手洗い、常時換気、ソーシャルディスタンス、消毒など、集団生活を支えていく上で、重要であり、一人ひとりの意識が求められる。そのため、職員間の連携による指導体制の確立や、生徒への指導・支援の徹底など、新しい生活様式への臨機応変の対応が求められた。

終わりの見えない長期にわたる取り組みの中で、職員も生徒もストレスをいつも以上に感じているようだ。

このような状況について、各家庭でのご理解とご協力が得られ、今日があることに、感謝したい。学校と家庭の連携こそ、これからはより一層求められると感じている。

- ・ 質問の結果をしてみると、教員は全員が様々な場面で命の大切さ、心の豊かさを育てる指導に努めていると回答してる。生徒については、ほとんどが命を大切にしていると回答しているが、2.4 %があまりできていない、できていないと回答してる。保護者においても、ほとんどが命を大切にす豊かな心が育っていると回答しているが、1.7 %ができていないと回答していることに注視しなければならない。教員側の認識と生徒と保護者側との認識の差があることも注意深くみていく必要がある。

毎年、1、2年生を対象に「命の授業」を3月に実施している。特別の教科道徳、学事、総合的な学習の時間などと連携した取り組みを通して、さまざまな場面を想定し、「命の大切さ」について学ぶ場の設定を行って行きたい。

③ 体力づくりの充実 <生徒⑮ 保護者⑯ 職員⑰>

- ・ 生徒の80.8 %、保護者の73.6 %が肯定的な回答だった。教員も96 %が肯定的な回答であった。多くの生徒や保護者、教員が「体力づくりの推進するための取り組みを行っている」と感じているので、今後も継続して取り組んでいきたい。

また、週1回の体力づくりは、北中の伝統でもあり特色だと感じている。今年は、3年生中心によく取り組んでいた。遅刻者や忘れ物も少なく、意欲的に取り組んでいる。体力づくりは、学友会の取り組みの1つでもあり、全校で取り組める大切な機会であるため、今後も北中体操を中心とし、内容を工夫しながら行っていきたい。

(4) 開かれた学校づくり

① 七校長会による情報交換と小中連携

- ・ この項目はアンケートはとっていないが、定期的に地域の小中学校の校長による情報交換や小中の連携のあり方について広く意見交換を行っている。今年度は感染症予防・学校行事のあり方・各行事の学校の対応など、多くの情報を提供していただいた。また、共通歩調で実施している「NO スマホ Day」は各家庭から多くの感想やご意見をいただくことができ、学校と家庭とのコミュニケーションの一環とし

て有効に活用することができた。

- ・ 学区内小中合同研究会は今年度実施できなかったが、各教科、特別活動等の連携や、生徒理解としての連携など、進学先となる中学校にとっては非常に重要であり、来年度以降も実施に向けて計画していきたい。

② 学校・学年だより等による情報提供 <保護者⑮⑯ 職員⑰>

- ・ 生徒、保護者、教員アンケート結果より、C・Dをつけた保護者が25名。全体の約10%であった。職員はCDはゼロという結果になっているが、職員の認識とは異なり、一部では情報発信が十分ではないと感じている面もある。

PTA活動や学校行事への参加については、意見が様々であった。CDと回答している保護者は86名で全体の34%を占めている。しかし66%の保護者は参加に前向きである。

- ・ 「保護者との信頼関係を築く」「家庭と連携して生徒への支援を行う」ことは、これからの教育活動には重要な要素である。職員間で共通理解を図るとともに、便りの発行には、内容、発行回数等、精査・検討しながら、きめ細かなよりよい情報発信に努めていきたい。また、PTA活動や学校行事への参加については前向きには考えているが、具体的にどのように参加できるのかを不安視している面も見られる。具体的な活動やその意義を理解してもらう場を適切に設定したり、参加しやすい環境づくりを行うなど丁寧な対応が必要だと考えている。家庭と学校の連携のあり方について今後も検討を続けていきたい。
- ・ 情報発信としては、学校ホームページも有効であるが、行事を中心とした情報発信や、学校からのお願い等のみ現状があるため、興味関心を高め、多くの方々に閲覧していただくような創意工夫が求められていると感じている。今後もその重要性を認識し、構成・内容を工夫しながら、特色ある学校ホームページづくりに努めていきたい。

③ 地域学習

- ・ 地域学習・ふるさと山梨コンクールについては、学校再開が遅れたことにより、社会科を中心とした学習での活用にとどまっており、今年度は十分な取り組みがなされていない。

人材の活用やふるさと山梨など地域教材を有効に活用し、生徒の視野を広め、地域を理解するとともに、将来の進路選択・自立に向けた意識の向上を図ることは大切であるため、来年度以降も計画的に取り入れていきたい。

3 自由記述より

(1) 職員アンケート

- ① 発問・学習形態・ICT活用など工夫して授業を行っている。
 - ・ 各教科で座席の位置やグループ編成を工夫し、対話を重視した授業作りに取り組んでいる。また、ICTを活用し、生徒の興味関心を高める授業も見られ、研究テーマに多くの視点でアプローチしている。今後は、タブレットを用いた授業のあり方などについて研究を深めるとともに、情報交換にも力を入れていきたい。
- ② 教科の研修に努め授業と家庭学習が連動するような工夫をしている。
 - ・ 授業と家庭学習の連動がうまくできていない。今後は各教科の関わり方について研究を進めるとともに、教科にかかわらず、日常生活と関わるような課題提示を行うなど、課題の内容にも焦点を当てていきたい。
- ③ 家庭学習の記録や新聞スクラップなど各学年の取り組みの成果はどうか。
 - ・ 学習記録の取り組みは、偏りが見られ不十分であり、分析検討を行う必要がある。新聞スクラップでは、生徒が考えをまとめたり、グループで交流しながら表現する機会となり、準備段階から意欲的に新聞を読む活動へとつながるよい取り組みとなった。
- ④ 学習ガイダンスを有効活用し生徒の自己評価が行えるよう工夫している。
 - ・ 学習内容や進度、評価の方法など学習に関する目標を確認し、意欲的に学習に取り組むことが大きな役割ではあるが、各教科で生徒への説明は行っているが、学習の様子など家庭への情報発信を行うなど、効果的な活用について今後は検討していく必要がある。
- ⑤ 家庭への連絡を定期的に行い、信頼関係づくりに努めている。
 - ・ 家庭への連絡や家庭訪問を計画的に実施し、保護者との連携を意識し、ていねいに対応している。今後も生徒・保護者との情報の共有を適切に行い、生徒一人ひとりへの支援を計臆して行っていきたい。また、家庭からの要望等について、職員全

体での共通理解を図って行くことも大切である。

- ⑥ 「考え、議論する」 道德実践と生徒の実態に即した評価を行っている。
- ・ 校内研究会や授業実践・授業観察を通して、「議論する」場面の設定のあり方、生徒の考えを刺激するような発問、実態に即した資料の活用など、多くのヒントをお互いに得ることができた。計画・実践・分析・改善と自分の授業を振り返るよい機会となった。
- ⑦ 教育活動全体を通して、思いやりの心を大切にしている指導を行っている。
- ・ リーダーの育成、集団の意識化を目指し、諸活動を見守り、評価と支援を適切に行うように心がけている。また、集団生活の中で、個人と集団を意識し、課題提示を適切に行い、様々な場面での考え方や行動のあり方について話し合い活動を実施してきている。
- ⑧ 学友会活動を通して、集団作りを意識した指導を行っている。
- ・ 生徒は、協調性があり、協力して何事に取り組もうとする意識が高く、自主的に活動している。各行事に目標を持たせ、学級・学年・ブロックを意識した取り組みの中で、職員間での情報共有を行い、それぞれの場面で評価、修正への課題意識を持たせるように指導している。
- ⑨ 学校生活のきまりやマナーへの意識を高める指導に努めている。
- ・ 落ち着いた雰囲気の中で学校生活は成立しているが、情報を共有しながら今後も生徒支援に努めることが大切である。また、新しい生活様式を意識した生活や日常生活における基本的なマナーの面では課題があることを認識し、さらなる意識化を図る必要がある。
- ⑩ 安心・安全な学校づくりに努め、生徒の意識の向上を図る指導を行っている。
- ・ 避難訓練や防災学習を通して、防災・防犯に関する意識化を図っているが、計画的に今後も継続していきたい。また、学校内の安全点検を毎月実施しているが、危険箇所や修繕箇所について全体で確認する場を設定していくことが大切である。

⑪ 様々な場面で体を動かすなど、体力づくりを推進するための取り組みを行っている。

- ・ 北中体操は本校の特色であり、守り続けたい伝統である。全職員で率先して体を動かすことが大切である。また、この伝統について学習する場を生徒だけではなく、職員にも設定してほしい。

⑫ 便りの発行を定期的に行い、学校の教育活動について適切な情報発信につとめている。

- ・ 定期的に便りが発行されている。今後は学校ホームページの更新も含め、内容を分析、検討し、多くの情報を取り入れた便りの作成に取り組んでいきたい。

(2) 保護者アンケート

① 学校行事について

- ・ コロナ禍で、様々な学校行事はもとより保護者参観が中止となる中、できる限りの感染予防対策をとり、北陽祭、合唱祭、授業参観を実施したことについて、多くの皆様より感謝の言葉をいただいた。ただ、参観回数が少なく、制限があったため、何らかの方法で生徒の活動の様子を見たいとの要望が多かった。

HP等を活用し、できる範囲で画像や動画を活用し、情報発信をしていきたいと考えている。また、生徒の安全を最優先しながら、保護者の皆様にもご参観いただけるよう、できる限りの感染予防対策をとり、生徒にとって意義のある行事づくりを目指したい。

② 生徒指導について

- ・ 学級担任をはじめとして、教職員の生徒への対応については概ね好評価をいただいた。ただ、わずかではあるが、時として言動（保護者への電話対応も含め）や対応が不親切に思えたり、威圧的に感じられる場面があったとのご指摘があった。

教職員一人ひとりが、生徒に寄り添い、生徒の声に真摯に耳を傾け、良さを認め伸ばす姿勢を再確認し、指導にあたっていきたい。

③ 学習について

- ・ 臨時休業日の延長により、授業日数が減ってしまったこともあり、各教科担当においては授業内容に緩急をつけながら、学習内容の積み残しがないように取り組んできた。ただ、教科内容によっては、教師側の授業構想と生徒の実態とに、ずれが出てしまっているとのこと指摘もあった。

これまで以上に学習内容の難易度や生徒の定着度を把握しながら、授業内容や進め方について研究し、実践していきたい。

④ P T A活動について

- ・ コロナ禍における教職員の多忙化解消のために、保護者としても、生徒のために「できることはしたい」との気持ちがあったが、学校からの具体的な協力要請がなかったためかなわなかったとの意見が多かった。

保護者の皆様にご協力いただけるよう、PTA執行部の皆様とも相談し、具体的な内容を検討していきたい。

⑤ その他

- ・ コロナ対策として、5月の学校再開より、夏季の服装は体育着を可とし、冬季衣替えにおいても、制服と体育着を組み合わせる着用を可としたことについて、多くの保護者から賛同のご意見をいただいた。

防寒着についてもローテーションが可能となるよう、これまでの規定を緩和した。

- ・ 校舎の老朽化に対する安全衛生面に対する心配が、多く寄せられている。

実際、今年度(12月末現在)の営繕申請は37回である。今後も生徒の安全衛生面を考えて、心配な個所が見つかった場合には、迅速に対応していきたい。